2007 年度 修了

# 統合失調症の当事者をケアする援助者が直面する困難とその対処
## ― ケアに内在する肯定的側面にも注目して ―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
市川　健祐

本論文では、精神科病院に勤務する 2 人の援助者の語りをもとに、精神科病院において統合失調症の当事者をケアする援助者が、（1）そのケア活動の中でどのような困難に直面し、（2）それに対してどのように対処しているのか、そして（3）困難に対処するだけにとどまらずケアという営みの中に何らかの肯定的な側面を見出しているかについて検討した。

当事者にとって「病的体験」に曝され自己の意思で自己の状態を制御できないことは「病い」に対して受動的であらざるを得ない事態であり、その意味で最も「しんどい」のは当事者である。その一方で、当事者と直接関わる援助者もある意味で困難な体験をしている。例えば、当事者のためを思って行ったケアも当事者にしてみれば容易に受け容れられる行いではなく、それゆえ拒絶あるいは抵抗されてしまうことは少なからずある。また、完治が必ずしも望めない状況で援助者に不全感が生じることも考えられる。しかし、そのまた一方で当事者との関わりの中に援助者が何らかの肯定的な側面や私たちが日常の中で保持している価値観とは別種の価値観を見出すことも考えられる。困難を感じながらも当事者へのケアを続けるには何らかの肯定的な側面が存在することもあり得るからである。

以上のような点を論じるにあたり有効な示唆を与えてくれるものとして、先駆的・革新的な高齢者ケアの現場において生成する〈自由〉を考察した天田（2004）の論考が存在する。本論文では天田（2004）の論考を導きの糸として、上記の 3 点を検討した。

その結果、援助者が直面する困難としては「混乱した当事者への対応に関するもの」、「病いを治療することそのものに孕まれる困難」、「慢性化した当事者への悲観的な思い」の 3 つが、そしてそうした困難への対処として「専門性に対する過剰な自負心の脱色」、「わきまえの認識」、「他者の苦悩を感受し責任を引き受けること」、「職業アイデンティティからの〈はみ出し〉」などが剔出された。さらに「職業アイデンティティからの〈はみ出し〉」は「当事者と通じる」という意味での「喜び」、つまりケアの肯定的な側面に通じる契機として存在し得ることが示唆された。

また、日常的に私たちが自明のこととして自己及び他者に適用している規範＝〈法〉を脱自明視する契機が統合失調症の当事者のケアの過程に存在することを指摘した。統合失調症などの精神障害の文脈では、それを「狂気」として排除の対象としてきた歴史があり、当事者へのケアではそのケア活動が「排除」や「懲罰」となってしまう危険性を回避することが要請される。規範＝〈法〉の脱自明視はこの要請に応えるものであるが、それは同時に援助者の「内部」にある「健常者」のアイデンティティをずらし、援助者自身が「宙吊り状態」になることであり、統合失調症の当事者のケアに内在する一つの「自由」であると言える。